

# おさええておきたことと 三題

鳥取大学教授 住川英明 すまがわ ひであき

## 筆の持ち方

適切な筆の持ち方を身につけるにあたっては、小学校低学年あるいは中学年の書写学習が大きな役割を担っているのは当然のことです。しかし、中学校に入學して最初に書写を学ぶときが、その学び直しの大きなチャンスであることも疑いの余地がありません。

毛筆書写についていえば、筆を①右に倒しすぎない、②手前に倒しすぎないということが筆の持ち方の要点です。「倒しすぎない」という持って回った言い方をしたのは、「筆を直立させる」こととの違いを指摘したいからです。

私は、筆管を少しだけ、右に倒し、かつ手前に倒していることが筆の持ち方としては自然なのだと考えています。そう

いなければ、終筆のとめ・はね・払いといった「筆圧」の変化によって成立する点画の細部を理解することはできません。加えて、一度墨液を含ませたら少なくとも一文字は書き続けることができなければ、毛筆を使う意味は半減してしまいます。

新しい学習指導要領に見られる書字動作の重視は、小学校高学年の事項に明記された「点画のつながり」という言葉に表れています。それは、一回きりの運筆によって字形を実現する技能が、日常の書字には不可欠であるという認識に基づいています。硬・毛の関連という観点から言えば、「一字一筆」は大切な原則です。特に、速書の場面に対応した行書の学習では、この筆脈を意識して学ぶことが重要です。この「一字一筆」の学びを保証するためには、筆の取扱いについての細やかな指導がまず求められます。

また、ホワイトボードの普及にとともに、硬筆としてマーカーがさかんに使われるようになりました。しかも、実際に使用する場面としては、書き手が立った姿勢で垂直の立面に書く場面が多いのです。これは学校生活のみならず、社会生活においても同じことがいえそうです。今後立って書写することは、話すことと

でなければ、穂先は点画の左側あるいは上側を通るという「穂先の動き」の原則が維持しにくい事態となります。

加えて、始筆の穂先の角度については、筆管の角度（指のかけ方）のほかに、腕の構え方も視野に入れなければなりません。肩に力が入ってわきの下を締めすぎているときは、とかく穂先が上を向いてしまうからです。

では、なぜ「直立」が唱えられてきたのでしょうか。それは右に倒しすぎている左方向への筆使いが、また手前に倒しすぎていけば始筆の穂先の角度が、大きな制約を受けるからです。たとえば、左払いの終筆で穂先をまとめることができなない場合は、右に倒れすぎであるといえますし、穂先の角度が上を向きがちで、結果として横画が太く、縦画が細くなりがちな場合は、手前に倒れすぎであると

関連して、情報伝達の場面でもり重要度が増していくものと考えられますが、その学び方にはいまだ定見がありません。現場の先生方の実践的な知恵を集めて、理論としてとりまとめていきたいところです。

## 「バランス」という言葉

書写の学習指導法を改善するための効果的な方法として、生徒に「バランス」という言葉を使わせない、もちろん教師も使わない、ということをお勧めしたいと思います。

試書の検討、規準の把握というプロセスは、授業の導入から展開にかけての大きな山場です。これは試書と参考文字（お手本）とを見比べるなどして、本時の目標を達成するには具体的にどこをどうすればいいのかわかる活動です。このとき、生徒は規準を自ら知ることができるとかどうか、また、教師はその発見を支援する手立てを用意することができるとかどうかが、学習指導上の大切なポイントということになります。

生徒が自分の試書を語るときによく口にするのが「バランスが悪い」という言葉です。漠然とした字形上の違和感を丸

いえます。「直立」はその対策として叫ばれてきたものでしょう。

左払いがなめらかに書けない、横画が多くなると文字が大きくなってしまったり、画間が均等に空けられないといったつまづきは、多くの場合、筆の持ち方に注目するだけで解消することが多いのです。

## 用具の取扱い

過日、朝日新聞の教育欄「きょういく特報部2009」に「毛筆の片付け、どうしてますか？」と題する記事が掲載されました。小学校の先生方が毛筆の後片付けに苦勞されている様子が報告され、その対策として「児童に空のペットボトルや空き瓶を持参させ、水を入れて机の上ですすぐ」という方法が紹介されました。すでに広く行われている方法ですが、こうした用具の取扱いがうまくいけば学習が滑らかに進み、次時への導入も楽になります。

また、現場の先生方とお話するときにもいつも私が強調していることは、「大筆、小筆のいずれにしても、一文字を書く間は墨継ぎをせずに書けるように、毛筆の状態を整えてあげてほしい」ということです。毛筆の柔らかさが確保されて

ごと表現できる点でもとても便利な言葉なのですが、ここでとどまっていたら規準が発見できません。このとき私は次のように問いかけます。「バランスという言葉は、『AとBとのバランス』というように、二つ以上のものの関係を示す言葉だね。あなたが言いたいのは、どこどここのバランスかな？」

よく聞いてみると、あるときは複数の画の長さの関係であったり、またあるときは複数の文字の大きさの関係であったりします。このようなやりとりを通して、生徒は点画や文字どうしの関係性についてはつきりと認識し、学習内容についての分析的な視点を得ることができ、さらに異なる題材を前にしたときに活用できる、字形を語るための具体的な言葉をもつことによって、自ら学ぼうとする意欲を高めることができます。

教師が生徒の気づきを整理し、集約することができるためには、まず教師自身が「バランス」の語に頼らないこと、それを日頃からさまざまな言葉によって言い換える準備しておくことが肝要です。新しい学習指導要領における「理解することの重視も、案外そのあたりに実現への入口があるのかもしれない」。